

河北潟

かほくがた



N P O法人河北潟湖沼研究所通信

Vol.13 No.3



ケアシノスリは、翼を拡げ風を掴む。(撮影 白井伸和氏)

ケアシノスリが越冬

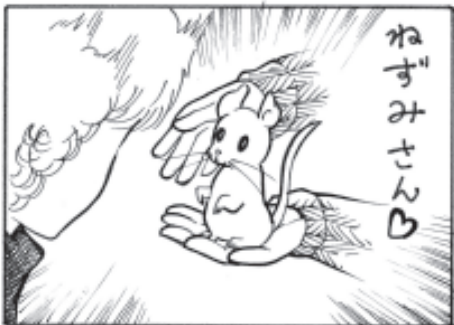
年明け早々に20羽ほどのケアシノスリが河北潟干拓地にやってきました。ケアシノスリは、主に大陸で越冬する猛禽類です。河北潟は全国的にも珍しく、毎年少数が越冬する場所として知られています。これほど多くの越冬はこれまで確認されていません。今年は本来の越冬地の寒波が厳しいのか、西日本の各地に多数が飛来しているようです。

河北潟干拓地では、狩りをする姿がこちらで確認できます。畑の上をゆっくりと飛びながら移動し、餌を見つけるとホバリングをして、ねらいを定めて急降下します。その餌は、畑に住むノネズミです。双眼鏡がないと特徴を細かくみることはできませんが、青空に白い翼

をいっぱい拡げて、ゆったりと飛んでいる鳥がいたら、ケアシノスリかも知れません。

冬の干拓地には、ほかにもいろんな鳥が隠れています。畑の真ん中には赤と緑の鮮やかなキジがぽつんと佇んでいます。ポールの上にとまったモズが、地面を行ったり来たり盛んに餌をとっています。嘴には冬にも拘わらず芋虫を銜えています。遠くの支線排水路から長い首が現れました。アオサギが水路の中を歩いています。頭上ではチョウゲンボウが、盛んにホバリングをしています。微妙に尾羽を左右に動かしながら、定位置を保っています。草藪の中でコミズクがじっと身を潜めています。農地に守られ、鳥たちは越冬します。

第7回 ネズミ



今年の干支、ネズミは、多くの方になじみの深い動物のひとつです。ペットになる種もいますが、駆除の対象となる種もあり、全体的にはあまり良いイメージを待たれない動物のようです。

河北潟干拓地には現在、5種類のネズミがすんでいます。ハタネズミは、畑鼠と書き、その名の通り田畑を好むネズミです。草食性で軟らかい草や根茎を食べますが、ダイコンやサツマイモなどの作物も食べるので、農家に嫌がられる存在です。アカネズミは、昆虫やクルミなどをよく食べ、森林を好むネズミです。干拓地には、樹林がほとんどありませんが、干拓地での調査結果からは、防風林帯とその付近の草地から多く確認されています(大串,2006)。

以上2種は日本固有の種ですが、以下の3種は汎世界的に分布する種で、人間の活動とともに広がった種です。家屋に侵入して人間の食べ物やゴミを食べるため、家ネズミとも呼ばれています。

ドブネズミは、繁華街の排水口にもすむ大型のネズミで、下水や湿地を好みます。雑食性ですが肉食性が強く、自然界ではミミズや貝類なども食べるようです。干拓地では、干陸後から農地造成が始まるまでの1970年代後半に大発生し、その後は少なくなりました(大串,2006)。ハツカネズミは、家の中にも現れますが、干拓地の草地や畑にもすんでいます。穀類やその他の種子を好むので、穀物倉庫に出没し被害をもたらしますが、畑では落ちた種子を食べているので、作物への直接の被害はないと思われます。クマネズミは、天井裏などの屋内にすみつくネズミです。穀類や昆虫などを食べます。干拓地内では、2002年に貯蔵庫から初めて確認されました(大串,2003)。

大雑把にみると、干拓地の農業にとってネズミ類は害獣ですが、アカネズミのように農作物とはあまり関係のない種もいます。農業被害の面からのみ、干拓地におけるネズミ類の存在がクローズアップされますが、一方で雑草の種子や害虫を捕食している可能性もあり、見えない部分での

農業への貢献があるかも知れません。また、ネズミ類は、猛禽類などの肉食鳥獣の餌として重要で、干拓地の生態系食物連鎖において要ともいえる動物です。猛禽類を頂点とする生態系が維持されること、つまりある程度のネズミがいることで、生態系が作用しネズミ類の極端な増殖が抑制されているとも考えられます。雑草や害虫・害獣を含め、動植物が豊かな河北潟において、それぞれの生物の見える部分だけでなく、見えない部分を含めて総合的に評価することで、よりよい条件で干拓地農業を続けられる条件が見つかるかも知れません。(文 高橋 久)

変化する河北潟東岸側の平野部

河北潟湖沼研究所生物委員会 高橋 久

河北潟の周辺では、平野部を中心に開発が進んでいます。とくに、東側の平野部の道路網の整備は著しく、現在、国道159号線の高架化がほぼ終わり、能登有料道路や山側環状道路との接続も完了しました。今後、河北縦断道路や津幡北バイパスの開通も予定されており、能登地区と富山地区を繋ぐ道路網が、この地区を要衝として一気に発展することが予想されます。

それに伴い交通量の増加が見込まれます。また、平野部の開発が進み、人口が増加することが予想されます。すでに津幡町では1995年からの12年間で約6000人の人口が増え、増加率は約16%となっています。井上ノ荘や緑が丘などの住宅地の分譲も進んでいます。2002年に北中条にアル・プラザ津幡が開業し、周辺の商業施設も増えていきます。さらに2008年秋には、かほく市内日角に「イオンかほくショッピングセンター」が開業する予定です。

こうした急速な発展は、地域社会のさまざまな分野へ大きな影響を与えられると思います。日々のくらしや地域経済だけでなく、河北潟東岸平野部の自然環境や野生生物へも影響が予想されます。河北潟の水域と広い水田地帯をもつことがこの地区の特徴であり、そうした環境に、ハクチョウやシギ・チドリ類等の水鳥たちが渡ってきます。タヌキやキツネも、この広い環境を利用しているようです。こうした野生生物がどのような影響を受けるのかについては、まだよく調べられていません。

河北潟湖沼研究所生物委員会では、ハクチョウをはじめとする野生生物の生息状況を、多角的な視点から調べていく必要があると考えています。実際の調査はまだまだこれからですが、今回はとりあえずこの地区の変化の概要として、空からみた変化の様子と簡単なGISを使って作成した人口の変化の様子を紹介します。



図1 空中からみた河北潟東側の平野部
左：1997年の河北潟東岸域（国土地理院発行の空中写真より作成）、右：最近の河北潟東岸域（「Google Earth」Image, (C) 2008 DigitalGlobe, (C) 2008 Googleより作成）。井上ノ荘の住宅団地造成をはじめ、中条地区や庄の大型商業施設とその周辺の開発が進んでいる。また、能瀬や領家など国道159号沿線北部での市街地化が始まっていることがわかる。

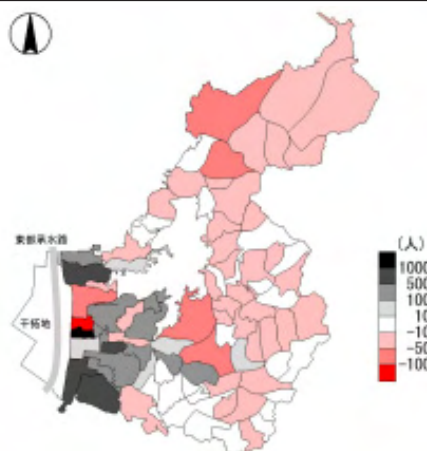


図2 津幡町における人口動態
1995年～2000年までの字ごとの人口の変化の程度を示している。黒塗りは人口が増加した地域、赤塗りは人口が減少した地域（「統計GISプラザ」町丁・字等境界データ、及びフリーソフト「Mandara」を用いて作成）河北潟東岸沿いでは川尻地区と舟橋地区で人口の減少がみられるが、隣接する井上ノ荘の人口増加が著しい。また、河北潟東岸沿い（国道159号沿線）及び国道8号線沿線に人口増加地区が集中しているのに対して、山間部での人口減少が目立つ。

第3回 潟端の暮らしを支えた道

河北潟の東側に位置する集落、「潟端」で暮らしてきた昭和4年生まれの坂野 巖さんに、水郷の景観を呈してた1950年代頃までの潟端の自然と人の暮らしについて聞き書きしています。

「越路の野山ひた走る 鉄路分れて能登に入る
岐に近きこの里に 建り我が学舎は・。」、この詩は中條小学校の校歌の一節です。潟端のある中條村には、山麓を鉄道が走り、北陸本線と七尾線の分岐駅（津幡駅）があります。そして駅から250mほど西に下った北国街道沿いに小学校がありました。

当時、荷物の輸送には鉄道の貨物列車が主体で、その荷物を扱う会社がどの駅にもありました。津幡駅ではトラック一台ですべての集荷・配達業務が行われていました。トラックは駅から街道を通過して、各地へ走りまわりました。

街道は、トラック、バス、オート三輪のほか、荷車や馬車、自転車も行き来しました。自動車は1時間に2～3台ほどしか通らず、エンジン音が騒がしく響くので、1kmほど離れた田んぼにいてもわかりました。また、高い建造物がなかったので、山裾を走る列車も田んぼからよく見えました。いつも11時30分頃になると金沢方面から、50車両ほど数えられる長い貨物列車が、黒煙をあげる機関車に引かれて、津幡駅に向かいました。これを見て、農家の女たちは昼飯の用意に家路に急いだものでした。



昭和20年頃の潟端（坂野さんの聞き取りに基づき作図）

北国街道（南中條の部落の南端）から潟端の部落の中央までの道は、車が通れました。路肩の両側が石垣で積まれた巾2間（約3m60cm）の立派な砂利道でした。この道は、大正2年（1913年）に、加賀神社（もとは諏訪神社）が県社加賀神社になったときに、神社が数10m道側に新築され、神社までの細道が掘られてできたそうです。通称「表道」と呼ばれ、毎年6月と10月の祭礼日には子供御輿や獅子舞がでて賑わいます。加賀神社より西は、細い砂利道でしたが、戦後に中条校下で消防自動車が購入されたときに、部落の奥まで車が入れるようにと道幅が広がられました。

また、この道の部落東端から街道に出るまでは、周りが田んぼで、戦時中にできた工場が一軒あるだけでしたが、道沿いに河原市用水の分水流がありました。生きものが豊富で、小学校の帰りに道草をする大事な場所でした。川底が砂質で歩きやすく、水も綺麗でした。水藻が所々に生え、暖くなると川魚がたくさん泳いでいるのが見えました。春先にハリゴ（イトヨ）という針の棘を持った銀色の川魚をつかまえた子もいました。ウグイ、フナ、モロコ、ドジョウ、ゴリ（ヨシノボリ?）、グズ（ドンコ?）、ナマズの子、6月以降は川魚はなんでもいました。そのほかシジミ貝、サワガニ、泥蟹（モクスガニ）、エビ類、蛙、トンボやホタルの幼虫、ゲンゴロウ、ミズスマシなど。川は左岸側は急傾斜の土手でしたが、道側（右岸側）は石垣の護岸で、石垣の上の方には時々ヘビもいました。ヘビをつかまえて、女の子にいたずらする腕白大将もいたようです。

部落の西側はもっぱら田んぼで、潟まで1kmほどあります。部落の西端から、南には七ツ屋につながる巾1～1.5mの道が、反対の北側には三昧川の川端に川尻につながる道がありました。いずれもその部落に行くときの近道で、日中の明るい時に通りました。泥が踏み固まった道で、裸足で走っても安全でした。

太田川と荒川の川端は、潟へ出るときの道でした。農作業の時に多く人が通るので、草が生えず、常に歩きやすい状態でした。田んぼの間の泥積みの畦も歩くことができました。細長い田んぼや、まるい田んぼなどいろいろで、畦に縁取られ、複雑な模様をつくっていました。

学校や町に出るときは下駄や草履、長靴を履いていましたが、田んぼ道は裸足がふつうでした。農作業のときなど重たい物を運ぶときは、舟が役立ちましたが、川が通じていない場所では「もっこ」を使いました。網状に編んだ縄の四隅に吊り綱を2本付けたものを、頑丈なもっこ棒に通し、前後2人で担いで運ぶものです。子供と大人で力の差があっても、つり下げの位置を変えることで上手く運ぶことができ、細道での運搬に適した有り難い道具でした。田植えの頃は、天秤棒で苗代田から苗を運びました。200束ほどの苗を詰めた苗籠を、天秤棒の両端に吊して肩に担ぎ、しなる天秤棒に歩調をあわせながら、1kmくらいは休むことなく歩くものでした。内灘の人が舟で渡ってきて、イワシなど新鮮な魚を天秤棒で担いで、荒川の岸边から部落の方まで売りに来てくれることもありました。また、自転車は最高の機動力でした。お医者さんは、歩けない病人の家まで、自転車で往診に来てくださいました。出産の時も、町から産婆さんが三輪車で来ていました。救急車や消防車がなかった頃は、歩けない病人は荷車によって、人力で運ばれていました。

田んぼ道を行き来するのは人だけでなく、牛や馬もいました。牛馬がかるうじて歩ける道幅なので、路肩がしばしば崩れました。馬は泥にはまると、あばれて脚を折ってしまうので注意が必要でした。路肩が崩れたときには修繕し、ハサ木を抜いたあとの穴には藁を詰め込むなど



県社加賀神社になったときの祭りの様子。
(写真：加賀神社所蔵)

して、歩きやすい道をつくっていました。部落の東側に馬渡とよばれる場所がありましたが、そこは川の底質が砂地で固く、馬の蹄が沈みませんでした。川を渡らせたり、牛や馬の汚れを荒洗いする都合の良いところでした。牛馬は農耕用に使われましたが、その歴史は浅いようです。潟端では農期になると山から共同で借りてきましたが、いろいろと面倒がかかることもあり、とくに馬を借りるグループは少数でした。農業機械が普及するとともに牛馬の姿は見られなくなりました。

道はすべて砂利や泥土で、崩れやすいものでしたが、壊れた状態で放置されることはありませんでした。歪んでいたり、凸凹した場所を、巧みに整える人もいました。

昭和22年からの農地改革を経て、潟端では昭和27～30年頃と、昭和41年(1966年)からの大きく2回に渡って耕地整理がおこなわれました。部落の中央を流れる前川には、舟が置かれていましたが、2回目の耕地整理のときに暗渠化され、道は拡幅してアスファルト道路ができました。舟は使われなくなり、車の時代へと変わりはじめました。

昭和28年12月に免許を取得した高橋喜久雄さんは、部落ではじめて貨物自動車マツダオート三輪を購入されて、薪や炭、材木、米を運ぶなど、雑用を請け負う仕事を始めました。小回りが利いて物を容易に運べるオート三輪は人気がありました。それは画期的な出来事で、時代が大きく変わることを、その頃強く感じていました。
(聞き取り・文 川原奈苗)

2005年8月20日(続き)

この日は午前中は近くの山の上でおこなわれる雨乞いのお祈りを見学する。

砂礫の平原の中にある療養所から地平にかすんで見える丘陵に車で近づくと、それは平地から300mほど高くなった、風化した礫に覆われた岩山で、山の一方はややゆるやかな、もう一方は急な傾斜の斜面となっている。緩やかな尾根道を自動車で半分ほど登り、それから少し急になった斜面を歩いて登る。地面は風化した岩盤にこぶし大から一抱え位の大小の礫が散らばり、疎らに草が生えている。その間を体長10cm位の、砂色に橙色の模様がある足の長いトカゲが、すばやく走り回っている。

少し平らになった丘陵の頂上に立つと、周りの広い砂漠がよく見える。

丘陵の上に高さ2m、横に7-8mほどの石垣のように大きな石を積み上げたオボー(天の神様を祭った地標、いろいろのな様式のものがある)があり、その横でお祈りがおこなわれる。地面に長方形の低い机を置き、その両側に2人ずつ、4人のラマ教の僧侶が低い椅子に座りお経をあげている。お経にあわせて小さな鐘と鈴、小型の手持ちの木魚を鳴らす。その周りに20人ほどの信者が座ってお祈りをする。机の上にはさまざまな食品のお供物が供えられ、オボーの中央に立ててある細い棒の前では香が焚かれている。読経の後半になると僧侶の一人が周りの信者の手のひらに米と粟を少しずつ載せてまわる。信者はそれを受けた手を丸く回してから少しずつ上空に投げあげる。同時に僧侶の一人が机の上にある酒を空に撒く。1時間ほどでお経が終わると、信者代表のような洋装の良い身なりの女性が立って、供物をオボーに供えてから参会者に配る。供物は日本でもスーパーで売っているクッキーのようなお菓子などである。それから参会者はオボーの周りを時計回りにまわりながら、近くにあるやや大きめの小石をオボーの上に投げあげる。オボーはこうして大きくなるらしい。(このお祈りの功德か、翌日には雨が降った)

この岩山の上には岩盤と粗い砂礫の間に疎らに

草が生え、後足で立って走るトカゲや、小型の砂色のヘビなどが見られる。岩山の上の気温は昼前で27度前後だった。昨日の岩山もそうだが、ゴビ砂漠の中の岩山や砂丘が、周りの平原と違った独特の生態系を造っていることがよく分かる。

午後は療養所から40kmほど離れた広大な草原の中でナーダム祭がある。モンゴルの夏祭りであるナーダム祭は近頃ではモンゴルの観光のひとつのイベントとして、とくにウランバートルのナーダム祭はしばしばテレビなどでも見られるが、このウーシ・マンハンのものはその小規模な祭りである。草原の中に設けられたグルで行われる。祭りのお祈りは外部のものが見ても構わないらしいが、私は見る機会がなかった(私が知っているインドネシアのイスラム教のお祈りは、特別な観光用のモスク以外では異教徒は見ることができない)。

お祭りの催しとして競馬と相撲が行われる。

この地平線までグル一つ無くほとんど人を見かけない草原のなかに、どこから集まったのか競技参加者のほかに200人余りの見物人が集まっている。途中で帰るものや後から来るものもあるが、多い時で乗ってきた自動車15、バイク18、自転車26、馬7が数えられた。これはゴビ砂漠の住民の交通手段を示すものと思われる。グルの前に運営関係者の長い机と折り畳み椅子が並べられ、見物人は会場のまわりに立ったり、砂地に座ったりしている。午後の日射しは強く、砂の上の温度は43度、地上1mの日陰で気温39度まで上がっている。

競馬は5歳から小学校6年までの少年少女の騎手が小柄なモンゴル馬を走らせる。緩やかに起伏する疎らに草の生えた砂礫原をスタート点からゴールまで25km、20数頭の馬が薄い砂塵があげて疾走する。応援する観衆は自動車やバイクで少し離れて伴走しながら声援する。先頭でゴールに



入ったのは青い服を着た10歳位の女の子だった。

表彰式があり優勝馬には金属

のメダルがたくさん付いた飾り紐を頭に掛けられ、騎手は賞品（ビスケットの箱）をもらう。

競馬の後は相撲。見物人が広く取り囲んだ中で、土俵がないモンゴル相撲。相手を倒した方が勝ちとなる。手（手のひら）を地面に付くのは構わない。レフェリーが2人とビデオ係が1人、付いている。選手が2組に分かれた勝ち抜き戦で、最



後に残った2人が決勝戦をする。周りには何もない広い空き地なので、優勝決定戦の最

中に大きな犬が取り組んでいる選手の傍に入ってきた。

相撲の途中に、空が曇ってきて辺りが暗くなり、大きなつむじ風が砂を巻き上げて試合が一時中断した。

競馬も相撲もそれぞれに形式にこだわらないところが面白い。

終わって療養所に帰ると午後7時頃。まだ空は明るくグルの中の気温は30度。

その夜は午後9時頃から療養所の5周年記念会。県知事を始め50人余りの人が集まる。その後、バンドが呼ばれて砂漠の星空の下で深夜までダンスパーティーがあったが、私は失礼して途中で休んだ。

モンゴル環境状況視察の旅...報告 3

2006年8月26日～9月8日の旅
大館小夜子

市場「ザハ」、民族舞踊、ボーイスカウト訪問、ブラリ市内散歩

夕方、ザハ（市場）見学に行く。市場はスリが多いので緊張したが、藤木さんがポケットに手を突っ込まれたが無事。お金を持っている人が分かるらしい。次の日は藤木さんと二人で市内見物に出る。デパートの向かいには「モンゴルサーカス」と「月」で民族舞踊を見た。客は殆どが外国人で午後7時に終わって外に出たが昼間のような明るさだ。街で食事をして歩いて帰る事に決め、ロシアカフェで食事とお茶を飲んでゆっくりした。ヨーロッパ系らしい男性と、モンゴル女性達が、親しげに互いの母国語らしい言葉で楽しげだ。屈託の無いモンゴル女性と白人男性はいかにも楽しそうだ。

私たちはそんな様子を見ながら地図を片手に帰る事にした。途中、迷子になりそうになり、少し遠回りをして遅い時間、11時過ぎに、ホテ



オンギ川運動家のムンクバイヤーさんたちと打ち合わせをする（右写真は太串先生）

ルに着くことが出来た。外ではディスコに人が多く集まって賑やかだ。そこら中に人がたむろ



して、身近な夏を皆で楽しんでいるように見えた。厳しいモンゴルの自然の中だからだろうと、しみじみとモンゴルの暮らしの厳しさを感じた。

翌日はオンギ川視察の件で、団体代表のムンクバイヤーさんと、事務局の仲間がホテルに来て、オンギ川視察の日程を詰めた。学生達にもオンギ川の現状をスライドで見てもらおう計画も話し合った。

翌日はモンゴルボーイスカウトの事務所に行く。モンゴルボーイスカウト運動や、環境運動の取り組みを聞いた。彼らの環境運動は、まだ不活発だが環境局と協力し、取り組んでいる。そして、今後、協力して取り組みたいと話し合った。モンゴルスカウトのユニークな施設での活動の様子を見せてもらい、お手製の立派な制服とチーフをいただいた。

干拓地で鳥類調査

グリーンアース河北潟が取り組んでいる、河北潟干拓地の農村環境向上活動に呼応して、河北潟湖沼研究所では干拓地の生物調査をおこなっています。干拓地に生息する生物の現状を調べることで、干拓地の多面的機能を評価するとともに、農業と野生生物の共存を探る上での基礎資料とするのが目的です。2007年11月から2008年1月までは、冬季の鳥類の調査を毎月1回、調査をおこないました。この調査では、ノネズミを食べる猛禽類やアオサギに注目して、干拓地での生息数のカウントや餌をとる様子の観察をおこなっています。

河北潟干拓地では多くの猛禽類がみられますが、冬季にはとくにノスリの姿をよく見かけます。全て越冬のために河北潟に移動してきた個体です。ノスリの主な餌はノネズミですが、その他にヘビやヒキガエル、モグラなどを食べることがあるようです。ヘビやヒキガエルは冬には見られませんが、河北潟のノスリはノネズミやモグラを目当てに集まっているものと思われる。これまでの調査では、毎回20～30羽のノスリが確認されていますので、見方を変えると、ノスリの餌であるノネズミが、干拓地にたくさん生息していると考えられます。ノネズミは干拓地の農家にとっては頭の痛い害獣ですが、ノスリは農家にとっては益獣であるといえます。その他、冬の干拓地には、チュウヒやコミズクなども集まってきます。これら猛禽類の主食もノネズミです。人の目には余り映りませんが、文字通り日夜（コミズクは夜行性です）、これらの猛禽類がひたすらにノネズミ退治



をしてくれませす。今年に入ってから例年はほとんどみられないケアシノスリも大陸からやってきました。20羽ほ

どが越冬しているようです。アオサギは歩きながらノネズミを探しては、一息に飲み込んでしまいます。

調査の詳しい結果は、河北潟湖沼研究所の機関誌「河北潟総合研究」に掲載される予定です。



干拓地の耕地で探餌するノスリ（2007年12月）

河北潟クリーン作戦のお知らせ

河北潟クリーン作戦は、河北潟周辺地域の恒例行事となっており、今年で第14回目を迎えます。流域から流されてきたゴミ、ポイ捨てゴミ、不法投棄されたゴミ、相変わらず湖岸にはたくさんゴミがみられます。多くのゴミは漂流して水辺に打ち寄せられますが、植生や水辺に生息する動物にも大きな影響を与えます。今年は、草が伸びはじめる前の4月に実施されることとなりました。春風の吹く河北潟で、ゴミ拾いに精を出しましょう。

日時：2008年4月13日（日）9：00～

集合場所：

才田大橋南側（全体集合地） 旧内灘大橋（河北潟湖沼研究所分担地区）

編集後記

今回の潟端の話を登場する高橋喜久雄さんは、潟端ではじめてマツダオート三輪を購入された方です。今年で88歳になられるそうですが、いまでも車を運転しているとお聞きしました。お元気ですばらしい！・・・いと全然違う当時の話は昔話のように聞いてしまいがちですが、やっぱりそんな遠い昔のことではないのです。（N）

